「肘折山水」をめぐって

Aroud the "Hijiori landscape"

三瀬 夏之介
MISE Natsunosuke

In the folding screen "Hijiori fantasy," Natsunosuke Mise painted eruption of a volcano 20,000 years ago, which is the origin of Hijiori. An interesting link with a scene of Japan originating from his hometown of Nara (=Yamato) can be seen.

Mise has painted the "Kikei" which is over 30 meters long," The Theory of destruction NIHON-GA," and "The Theory of Restoration NIHON-GA," searching for the condition of Japan in Japanese style painting. The scenes of Japan such as Mt. Fuji, the Great Buddha and five story-pagoda painted by Mise include the present and the past intertwined with each other, and it seemed that the pictures were going to expand infinitely to deliver the images to contemporary art scene.

The "Hijiori fantasy," however, has closed thoughtfulness attached thereto like a drop curtain closing quietly. The mountains are moving stickily in ink painting which has unseen darkness, and steam including volcano heat has obscured the outline of the mountains.

Mise has moved to Yamagata prefecture and has been working on paintings with the question of "Is the Tohoku style painting possible?" He is preparing to shake Japan in Japanese style painting from the Tohoku district.

はじめに

本稿は2009年秋に開催された『肘折版現代湯治2009』(山形県大蔵村肘折温泉）への出品作『肘折幻想』の記録である。地元住民や民俗学者らの案内によって同地での詳細な取材を重ね、最終的に閉鎖された旧肘折郵便局舎に設置された屏風絵『肘折幻想』は、筆者が構想する『東北画』のはじまりを記す記念碑的な作品となった。

肘折温泉は大同二年に開湯したと伝えられている。肘折だけでなく、東北各地の多くの寺社や銅山や温泉地が「大同二年に開かれた」という伝承を有している。言わば、歴史的な〈はじまり〉として東北の大地に刻印されたこの謎めいた年号は、坂上田村麻呂による蝦夷征伐と重なり合うことで、大和朝廷による東北の軍事・経済・宗教における制圧の記憶を逆説的に物語っている。

三瀬夏之介による十曲の屏風図『肘折幻想』は、二万年前の「火山の爆発」という、もう一つの肘折の〈はじまり〉を描いたものだが、画家の郷里であり度々モチーフとして描かれる奈良（＝ヤマト）に端を発する「ニッポン」の情景と、興味深い因果関係を見せる。

これまで三瀬は、全長三〇メートルを超える大作『奇景』や、『日本画滅亡論』、『日本画復活論』などで、持ち前の諧謔的オリエンタリズムを発揮し、常に「日本画」における「日本」のありようを問い続けてきた。三瀬の描くあけすけな世俗に塗れた富士山や大仏、五重塔などの「ニッポン」の情景は、現代と過去がめまぐるしく交錯する奇怪なコラージュの化粧に覆われており、そのイマージュの版図を今日のアートシーンに拡げるべく、画面は無限に巨大化する気配を漂わせている。

しかし『肘折幻想』に三瀬は、かつての狂想曲のような表層のアウラではなく、静かに閉じられていく緞帳に似た、ある種の閉ざされた思慮深さをまとわせている。

二〇〇八年の作品『ぼくの神さま』でファルスのように画面から突き出していた山々は、ここでは不可視な闇を孕んだ水墨のなかで粘動し、火山の熱を含んだ蒸気がその輪郭を曖昧化させている。

現在、三瀬は山形に居を移し、『東北画は可能か？』という問いを自ら掲げて制作に取り組んでいる。肘折温泉の起源を「大同」の伝承に依拠して描くのではなく、「正史」以前の曖昧模糊とした世界として知覚し、「山の生成そのものの記憶」として描いたその眼差しの先には、自らが指向してきた歴史化・記号化された「ニッポン」の風景に対峙する『東北画』の母型があったはずだ。その寡黙な画面の裏側で、東北の地から「日本画」の「日本」を揺るがすような視座の獲得が準備されている。

（宮本武典）

執筆者

三瀬夏之介　芸術学部　美術科
MISE Natsunosuke　School of Art/Department of Fin Arts
准教授
Associate Professor

解説

宮本　武典　美術館大学センター
MIYAMOTO Takenori　Center for University as Museam
講師・主任学芸員
Lecturer・Curator

写真　宮本武典＋瀬野広美（JEYONE）

『千歳』三瀬夏之介
サイズ可変／墨、胡粉／2009年制作／東北芸術工科大学アトリエでの制作風景

『肘折幻想』三瀬夏之介
十曲一隻／墨、胡粉、顔料／ 2009年制作／旧肘折郵便局舎